

## ねぐら minus

昔はよかったなあ。七三年といえば、星新一も光瀬龍も、矢野徹も生きていた。大伴昌司やブルース・リーはこの年死んだけれど、福島正実だって元気だった。ゼラズニイはもちろんなアシモフやアンダースンが生きていた。筒井康隆や眉村卓は三十代、田中啓文や村井さだゆきは小学生だ。大阪万博は終わったけれど、名古屋オリンピックや沖縄海底博、筑波衛生博覧会は開かれていない。ベトナムはフランスと戦争して、カンボジアとも戦争して、いやいや中国と戦争してたんじゃなかったか、アメリカだったか。ロシアはまだ革命が起こる前だ。昔はよかったなあ。月着陸から四年、宇宙ステーションが宇宙人に襲われてから十四年、星間戦争は遙か昔の出来事だけど、日本で知られるのは五年も先の話した。日米間のテレビ中継ができなかったせいだ。初放送はケネディ暗殺だったなあ。日本だけが沈むという預言書が流布し、日本以外が全部沈む説と競い合って両方とも賞をとったのは、七四年の地震学会だった。正力松太郎賞だったか。昔はよかったなあ。ファンジンを出すのは大変だったが。紙がなくて、紙漉きのために六甲山に自生するケナフを刈った。昔の六甲には、お寺から逃げ出した虎が棲んでいた（「帰らぬトラ」と呼ばれていた）。製本は十センチもある畳針で縫い合わせたオフセット印刷技術が出来上がる前だから、木版で刷るのは本当に時間がかかった。昔はよかったなあ。物価は安かった。文庫は三百円、ハードカバーだって千円しなかった。コンピュータは部屋の大きさ、電話は黒電話、通信はテレックスだった。それでも石油の一滴は血の一滴だった。石油を使った製品を無駄にすると国家反逆罪だった（夜間灯火管制が敷かれていた）。忘れている人も多いが、まだ日本は軍政下だった

のだ。東京のSF大会に行こうとしたら、汽車で二日がかかりだった。東京は焼け跡闇市で米持参で旅をしないと飢え死にだった。昔はよかったなあ。「SFの浸透と拡散」が、実はゲームとコミケ文化への拡散だとは、誰も気が付いていなかった。SF研なのにゲームばかりという予兆は当時からあった。昔はよかったなあ。時代はニューウェーブで、「SFマガジン」創刊以来十三年も経った旧態依然のSFをぶち壊す心意気だった。未来は薔薇色だった。競馬評論家の山野浩一も、自費でSF雑誌を発行していた。雑誌名は「SFの本」だったよ。うな気がする。昔はよかったなあ。ゲーム会社社長の安田均さんもまだ単なるSFファンで、灘軍管区にあったアパートに詰め込まれた洋書の山を、よく発掘しに行ったもんだった。それもゲームの山が変わっていくのだが。灘区といえればフリーメーソンの組事務所があつて、血で血を洗う抗争事件も何度か起きていた。昔はよかったなあ。今から考えれば、とんでもない時代だと思うかもしれない。作家も編集者もみんな若かった。読者と作家も近く、プロとアマチュアも近かった。ファンがプロを罵倒しても無視されなかった。ふつうに議論ができたし、その座談会がプロ雑誌に載るほどだった。一年先輩の水鏡子は、面前罵倒王と称され恐れられていた。昔はよかったなあ。しかし、もう三十三年もたってしまった。筆者の年度からすれば三十二年だが、まあ大差はない。占領下から独立して西日本国になって三十年、時代が変わるのも止むを得ない。東人民共和国の同朋からも原稿が集まるときいて、世の流れを感じる。SF研の新たな時代を祈念して、昔語りを終えよう。

注：本稿は、筒井康隆「昔はよかったなあ」に準拠しておりますが、オリジナルのノンフィクションです。とはいえ、人物・固有名詞・事件名が読者諸兄の記憶と異なっているように思われるかもしれません。